

2022年8月14日（日）主日朝礼拝説教

『人生の終わりに』井上隆晶牧師
ヘブライ書 13章 7～16節、マタイ福音書 24章 36～44節

①【死の準備をしない人間たち】

地上に生きるすべての者が誰ひとりとして逃れることのできない共通した宿命があります。それは死です。戦争により、災害により、病気や飢饉、事件や事故、火災や水難、刑罰や寿命により、いろいろな死には違いますが、確実にやって来るものが死です。それなのに、あまり死の準備をしている人を見たことがありません。「終活」という言葉が流行りました。「人生の終わりのための活動」の略字ですが、自分史を書いたり、身の周りの物や財産を整理したり、遺言を書いたり、葬儀の仕方を決めたりすることはあっても、神の前に立つ準備をする人はあまりいないのです。私の父は86歳で亡くなりましたが「自分は神の前に立つ準備をしなければならぬ」と言ったような言葉を一度もその口から聞いたことがありませんでした。お墓参りに行けば「わしももうすぐそっちに行くぞ」とは言いますが、罪の懺悔もせず、神の裁きも畏れていませんでした。父の死を見た母もそのような準備をしているかという、何もしていません。人は歳を取れば自然に来世のことを考えるようになるわけではないのです。なぜ人は死を準備しないのでしょうか。私の考えでは人間の罪と関係していると思われます。罪による報酬は死です。罪を考えないから死を考えないのです。そして罪とは何よりも神よりの分離ですから、罪によって麻痺した心は、神を抜きにして人生のすべてを考えようとします。19世紀の聖イグナティ・ブリアンチャニーノフは「罪人は臨終の時を迎えても、死ぬ準備も、来世に行く準備も少しもできておらず、死とは何か、来世とは何か、明確な知識さえみじんもない。そして準備できていないまま地の面から連れ去られ、神の怒りを買った者として永遠の地獄に落とされることになる。」と語っています。

②【人の生死は神が支配している】

もう一つ死に対して考えなければならないことがあります。死はある日突然にやって来るということです。それは、私たちは自分の命をコントロールできず、私たちの人生を支配しているのは神であることを教えているのです。イエス様はノアの洪水の例から「人の子が来るのはノアの時と同じだからである。…ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり、飲んだり、娶ったり嫁いだりしていた。そして洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった。」（マタイ 24: 37～39）と語ります。ノアは洪水によって地上のものを滅ぼすという、神の言葉を本気で聞いて、生き残るための準備を始めました。その準備は片手間のできるようなものではありませんでした。しかし人々は神の言葉を恐れず、気にも留めず、忘れてしまいました。雨が降り始めても、それが世界の終わりのしる

しだとは気がつかなかったのです。彼らは神を主人とせず、自分中心に生きていたからです。イエス様は「だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰ってこられるのか、あなたがたには分からないからである。」(マタイ 24:42)と云われます。私たちの人生の主人は神であって、私たちではないのです。突然の死で思い浮かぶのは、安部晋三元首相の死です。彼はまさか今日、自分が死ぬと思って街頭演説に立ったのではないでしょう。死は突然にやってきました。TVのマスコミがこぞって語ったのは、安部元首相の死に対して、警備の仕方が悪い、奈良県警の責任だ、統一協会の責任だ、とすべて人間の責任でした。私はそのような報道を聞いて唾然としました。誰も「神が召された」と言わないのです。まあ、言えないでしょう。それはコロナ医療に対しても同じです。すべてを人間の責任にします。人間は寿命までもコントロールできると思ひ込んでいます。聖書はヘロデの死に対してはっきりと宣言します。「ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、集まった人々は『神の声だ。人間の声ではない』と叫び続けた。するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。」(使徒 12:21~22) イエス様も語っています。「(雀)一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。」(マタイ 10:29)人の生死は神が定めているのです。神が許すから私たちは生きられるのであり、神が召されるから人は死ぬのです。昔の人はそのことを体験で知っていました。神を抜きにして考えるこの世は狂っています。人間がすべてになっています。それが私には恐ろしく感じるのです。

③【礼拝の生活、神と共に生きる生活をしない限り人は死の準備はできない】

ではどのようにして目を覚まし、用意をしたら良いのでしょうか。礼拝の生活することです。聖なる生活を抜きにして目を覚ますことも、準備をすることも決してできません。キリストの教えは、人の知性と心を清め、人をこの世に対して死んだ者とし、神の国に対して生きた者(目覚めた者)とします。礼拝は神の前に立つことですから、自然と神の国を意識させ、キリストを自分の主人として生きるようにさせます。特に修道院の祈祷は、祈りの中で母マリア、聖人たち、天使たちに呼びかけます。向こうの世界の人に語りかけるので、永遠の命を意識するのです。そのような祈祷をしない限り、人は神の国を意識することも、その国に向かって生きることもできないでしょう。また祈りの中で死者の名前を呼ぶことは非常に効果があります。私たちもいつかその群れに入ることを思い出させ、人間の限界と無力さを教え、キリストに頼る心を起こさせるからです。

● 7世紀のダマスコのヨハネは床につく前にこう祈ります。「人を愛する主よ、この床がわたしにとって棺となるのでしょうか。あるいは、なお一日の昼をわたしの汚れた魂に与えて下さるのでしょうか。御覧下さい。棺はわたしの前にあり、死はわたしの前に立っています。」晩堂大課の中にはこんな祈りがあります。「わたしの魂よ、わたしの魂よ、起きなさい。どうして眠るのですか。終わりは近づいているのに、あなたは心を乱しています。故に、目を覚ましてい

なさい。全地にいまし、万物を満たすキリスト神が、あなたに赦しを与えられるためです。」

死を思うことは人間を謙虚にさせ、有益です。実際、ヨナの「あと40日すればニネベの都は滅びる」(ヨナ3:4)という宣教の言葉を聞いて、ニネベの人は死を思い、悔い改めて滅びを免れました。「何事をなすにも、お前の人生の終わりに心を留めよ。そうすれば決して罪を犯すことはない」(シラ7:36)とも書かれています。

④【キリストは死を滅ぼし、すべての人を生かされる】

●大阪府立西成高校の山田勝治(やまだ かつじ)校長先生がTVに出ておられるのを見ました。西成区は釜ヶ崎などもあり、貧困家庭が多いのが特徴です。そこで学校では「反貧困学習」授業をし、貧困を生み出す社会の仕組みや、貧困から身を守る社会制度について学び、生き抜く力を身につけさせます。校長先生は学校改革をします。生徒だけの喫茶室を作り、アルバイトを推奨し、働いている生徒の為に授業の始まる時間を遅くしました。年間で記録しているだけで600回家庭訪問をされるといいます。それまでは荒れた高校でしたが、今では就職内定率100%になりました。校長は「仲間を見下さない」、「自分を絶対にあきらめない」ことを言い続けているそうです。生徒を決して見捨てない先生なのです。

600回家庭訪問をされるとは大したものだと思います。人間でさえもこのように人と関わり、人を見捨てない深い愛があるのですから、キリストが私たちを見捨てるはずがないのです。

私たちは必ずいつかは夫婦も親子も友人も別れなければなりません。死は私たちから愛する人たちを奪ってゆきます。死は誰をも恐れません。死が恐れるのはただ一人キリストだけです。彼は死を滅ぼしに来たからです。「最後の敵として死が滅ぼされる」(Iコリント15:26)と聖書にあるように、死は妥協すべきものではなく、神と人類の敵です。死が存在する限り、私たちは悲しみ続け、平安はありません。だからキリストは死を滅ぼすために、死の世界の中に入って行かれます。キリストの足音を聞いて死は震え、彼に触れたので死は麻痺して死んだのです。「キリストは死を滅ぼし、…不滅の命を現わしてくださいました。」(IIテモテ1:10)このキリストと一体になる者は死にません。時が来ればやがて、必ず復活します。聖餐式はその先取りの祝宴です。聖餐は、キリストにあって天上の人と地上の人、死者と生者が一つの体にされることを体験させます。聖餐はキリストの命をいただき、赦しを飲む式です。こうして死んだ者の上にも生きている者の上にもキリストの命が浸透してゆくので、すべての人の罪は赦され、死は消滅し、不滅の命が始まるのです。その時、死の勝利は終わります。キリストの元で死は消えるからです。キリストによってすべての人が生きる世界が始まったのです。ですから暫くは姿が見えませんが、やがて会える日が来ますから、それを楽しみに、しっかりとキリストにつながり、希望をもって生きましょう。